

昭和初期小学校音楽科教育の形成過程に関する研究 —長野県飯田市の事例をとおして見る地域と学校—

本多佐保美¹⁾ 西島 央²⁾ 永山香織³⁾ 大沼覚子⁴⁾ 藤井康之⁵⁾

¹⁾千葉大学・教育学部 ²⁾首都大学東京・都市教養学部 ³⁾筑波大学附属視覚特別支援学校
⁴⁾東京芸術大学大学院・日本学術振興会 ⁵⁾奈良女子大学・文学部

A Study of the Formative Period of Music Education in Primary Schools in the 1920–1930's

—the community and schools in *Iida* City of *Nagano* Prefecture—

HONDA Sahomi¹⁾ NISHIJIMA Hiroshi²⁾ NAGAYAMA Kaori³⁾
OHNUMA Satoko⁴⁾ FUJII Yasuyuki⁵⁾

¹⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

²⁾Faculty of Urban Liberal Arts, Tokyo Metropolitan University

³⁾University of Tsukuba, Special Needs Education School for the Visually Impaired

⁴⁾Tokyo University of the Arts Graduate School, Japan Society for the Promotion of Science

⁵⁾Faculty of Letters, Nara Women's University

キーワード：昭和10年代 (in the 1920–1930's) 音楽科教育 (music education)
地域と学校 (community and school)

はじめに

本多佐保美

本研究の目的は、我が国の小学校音楽教育が唱歌教育から脱皮し、音楽科教育としての成立条件を整備していった昭和初期（1930～40年代）の動向に焦点を当て、その形成過程の諸相を明らかにすることにある。そのためには、当時の学校音楽を取り巻く状況を多面的に見ていく必要がある。一方で、昭和16年の国民学校制度実施以前の音楽教育家、実践家たちの動向と制度成立への働きかけの様相等を見る必要があり、他方では、当時、昭和初期の実際の学校現場での状況や、学校と地域との関わりについてミクロに把握する視点が必要である。本稿では特に後者に焦点化し、長野県飯田市の学校を事例に研究を行っていく。

これまでに2000（平成12）年頃より長野県上伊那郡高遠町、高遠小学校を中心とする調査や、東京都文京区誠之小学校の調査等を行ってきたが¹⁾、それをふまえ長野県飯田市における調査は、2005（平成17）年頃から飯田市立座光寺小学校、飯田市歴史研究所、飯田市立上郷小学校等への所蔵資料調査を実施した。また、飯田市座光寺地区、上郷地区住民（昭和5～9年度生まれの方々）を対象としたアンケート調査を2007（平成19）年5月に実施した。発送総数839通、返送数186通、回収率は22%であった。

昭和初期という時代は、どのような時代だったのだろ

うか。細川周平は、ペリーの浦賀来航から終戦の昭和20年に至る時代を3期に区分している（細川周平 1998）。第一期は、洋楽が公式文化となる半世紀（1853～1905）で、唱歌が歌謡の基礎、軍楽隊が器楽の基礎となった。第二期は、日露戦争が終結した1905年から大正時代の終わる1925年までで、マンドリンやハーモニカなどアマチュア合奏団の進展、セノオ楽譜を筆頭とした楽譜出版業、また音楽雑誌など音楽ジャーナリズムの発展、レコードの普及等が見られたこの時期は〈大衆化〉の時代ととらえられる。第三期は、1925年～1945年の20年間で、ラジオ本放送の開始（1926）、新交響楽団の設立（1926）、やはり唄に触発された映画の製作（1924）、日本コロムビア、日本ビクターの設立（1927）など、1925年の前後に相次いで時代を特徴づける出来事がいくつも起こっている。この時期を細川は〈産業化〉〈テクノロジー化〉の時代と規定している。

『「キング」の時代—国民大衆雑誌の公共性』（2002年、岩波書店）を著した佐藤卓己も、大衆雑誌『キング』の創刊された1925年を、現代史の出発点ととらえている²⁾。

細川が〈産業化〉〈テクノロジー化〉の時代ととらえた昭和初期は、まさに国民学校の制度を準備した時代であり、レコード産業や楽器産業の発展は音楽科教育の内容の変化と直結した動きだった。音楽教育の歴史をこうしたいわばメディア論的視点から捉え直すことによって、戦前から戦後を見通した大きな時代把握が可能ともなる。本研究はこうした課題意識にもとづくものである。

飯田歴史研究所には、この時代に発行された各地域の地域誌が残されている。その記述から当時の地域の状況

連絡先著者：本多佐保美

を知ることができる。『上郷時報』（上郷村農会事務所発行）昭和11年12月1日号によると、業家別総家族数は農家4,149人、商家279人、工家1,063人、その他1,299人（合計6,790人）であり、農家が61%という状況であった。また、「職業紹介斡旋」欄（昭和11年2月1日号）では、募集地域は岡谷、諏訪、東京、名古屋など、職種は小売員、見習工等、求人年齢は15～6才から、12才からもあり、小学校の高等科を出てすぐに働くという状況がわかる。昭和14年7月15日号の「職業紹介欄」では、南信自動車車掌、桶製造、貨物運輸運転手など、名古屋、静岡では紡績、毛織、生糸繰糸雑役などの募集があった。

1. 教育費からみる音楽科教育の形成過程試論
— 竜丘小学校の学校文書を中心に —

西島 央

(1) はじめに

唱歌指導のみを教育内容としていた唱歌科から、鑑賞指導や器楽指導も教育内容に含む音楽科教育が成立していくには、ピアノなどの楽器や蓄音機やレコードといった『モノ』の整備が不可欠であった³⁾。私たち研究グループのこれまでの研究で、個々の学校現場では、昭和16年度の、鑑賞指導や器楽指導を教育内容に含んだ芸能科音楽の制度化を待たずに、『モノ』の整備が進んできたことを明らかにしてきた。ところで、『モノ』を整備し、維持するためには、経費がかかったはずである。その経費はどのようにまかなってきたのだろうか。本節では、旧竜丘村の事例を中心に史料から検討してみよう。

(2) 教育費のしくみと歳出の状況

尋常高等小学校の教育費は、設置主体である市町村が支弁するのを基本とし、昭和14年度までは、義務教育費国庫負担法により国庫の定額負担があり、昭和15年度からは、教員俸給は市町村の負担から県費による負担に移行し、かつ、国庫の負担は定率制に変わった。なお、『モノ』にあたる教材等に係る費用が国庫負担となるのは昭和28年度からである。

市町村の教育費に計上される費目は、教員俸給、生徒給費、借地借家費、備品費、消耗品費、新営費、修繕費などであった。ただし、『モノ』の費用にあたる備品費や消耗品費の用途は、法律等によって詳細に定められていたわけではなく、その裁量は今日に至るまで市町村と学校にある程度委ねられてきている。

このような教育費の法規程だったため、『長野県教育史』によれば、財政規模の小さい全国の町村では、昭和15年度以前は、歳出全体に占める教育費の割合が40%前後を占めていた。また、その教育費のうち備品費や消耗品費が占める割合は10%程度に過ぎず、教育費の多くが教員の給料だった。昭和10年代までの都道府県や市町村にとって、教育費、それも教員俸給が財政の大きなウェイトを占めていたのである。

(3) 竜丘村の教育費と音楽にかけた費用

竜丘村では、昭和10年代に財政全体のうちどの程度を教育費にかけており、その教育費のうちどれくらいを音

楽のために使っていたのだろうか。

『竜丘村勢一覧』から昭和10年代の竜丘村の歳出の総額と教育費にあたる公学費をみてみると、例えば昭和12年度は、歳出総額が38,252円、公学費が19,913円で、そのうち教員俸給は14,610円だった。総額に対する教育費の割合は52.1%に上り、一方で教育費のうち教員俸給以外に使える額は5,303円にとどまっている。前後の年度を見ても、歳出総額に対する教育費の割合は50%前後で、全国の町村平均と比べると、歳出に対する教育費の負担は大きい方だった。また、教員俸給を支出していた時期には、備品費や消耗品費他に充てられた額が2,000円台から7,000円台であった。

では、そのお金をどのように使っていたのだろうか。表1と表2は、昭和12年度の竜丘村の費目別歳出一覧と、そのうちの小学校費の需用費の内訳一覧である⁴⁾。

表1 昭和12年度竜丘村 歳出 表2 昭和12年度竜丘小学校 需用費

経常部計	33986円	小学校費需用費	2478円
神社費	195円	備品費	889円
会議費	164円	校具費	70円
役場費	6391円	図書掛図費	169円
土木費	55円	理科機械標本費	194円
小学校費	18367円	運動用具費	171円
給料	15408円	体操用具費	92円
雑給	547円	図画手工用具費	13円
需用費	2120円	音楽用具費	40円(レコード5枚10円)
修繕費	145円	ピアノ、オルガン調律費	30円
恩給基金	147円	掃除用具費	35円
青年学校費	2168円	児童実験用具費	54円
学事諸費	130円	家事裁縫用具費	12円
図書館費	461円	農具用具費	16円
伝染病予防費	243円	雑品費	9円50銭
隔離病舎費	15円	消耗品費	582円
勸業費	403円	帳簿用紙類	66円
社会事業費	3162円	実習地費	65円
警備費	650円	電話費	70円
基本財産造成費	127円	電灯費	50円
財産費	406円	借地費	208円
積立金殺	68円	通信運搬費	13円
諸税及負担金	190円	賄費	37円
交付金	1円	生徒諸費	30円
雑支出	85円	雑費	176円
予備費	705円	修繕費	145円
臨時部計	4266円	恩給基金	147円
小学校修繕費	500円		

『昭和十二年度長野県下伊那郡竜丘村歳入出予算』より作成

表1によれば、小学校費は18,367円で、そのうち給料が15,408円、備品費や消耗品費にあたる需用費は2,120円だった。その需用費の内訳を表2から詳しく見てみると、音楽用具費はわずかに40円（レコード5枚10円、ピアノ、オルガン調律費30円）で、小学校費の0.2%にすぎない。

また、竜丘小学校の校長を務めた平沢米三文庫の史料からは、昭和5～6年度の音楽関係費用がわかる。例えば昭和5年度には、「鑑賞用レコード15円十枚」「楽器修繕費45円」「ピアノ一台オルガン二台計三台」「蓄音機修繕料5円一台」「楽器調律35円」だった。昭和12年度よりは多いが、同程度の支出である。

では、レコードをかける蓄音機や、調律や修理された

ピアノやオルガンはどのように購入したのだろうか。竜丘村史の記録によれば、昭和2年にグランドピアノと蓄音機を購入している。なお、近隣の上郷村では、昭和10年にグランドピアノと電蓄が寄贈されている。

当時、蓄音機は、手回し式が40～200円、国産電蓄が70～300円、外国産電蓄は200～800円程度だった。また、ピアノは、グランドピアノが950～1,800円、国産アップライトが350～1,200円程度だった。教員俸給以外の教育費が2,000円～7,000円だったことをふまえると、蓄音機やピアノの値段は、教材費等に使える教育費に対してかなりの比率を占め、経常の教育費から簡単に支出できる額ではなく、それらの購入にあたっては、多くの場合、寄付に頼っていたのである。

(4) 考察～教育費から教育実践を読み解く研究試論

音楽に関する『モノ』の整備と維持のために、教育費と寄付が使われていたことがわかってきた。教育費から支出された額は非常に少ないものであったが、ここで重要なことは、寄付の存在である。寄付は、直接教育費ではないが、その寄付が成立するような地域社会だったことが、最終的には、教育費のなかでレコードの購入等を行うことにつながっていると考えられる。

この先は、“試論”ということになるが、教育行政上定められていたのは、教育費の大枠の費目までで、その内訳は個々の学校に委ねられていたもので、ここに制度と実態のズレを生じさせる“遊び”が生じていた。その部分をそれぞれの教科指導においてどのような教育内容の実践を行うためにどのように使うかは、市町村立の小学校の場合、市町村の社会状況にある程度影響されていたのではないだろうか。音楽教育に関していえば、その教育内容は法制度にのみ縛られていたのではなく、その地域社会の音楽を含む文化状況と学校音楽の整備状況に一定の相関関係があったと考えられるのだ。

そのように考えると、個々の地域や学校でどのような音楽教育がなされていたかを明らかにするためには、制度との関係を明らかにするだけでなく、教育費のかけ方や寄付の背景を探ることによって、それぞれの地域において教育に対してどのような役割期待をし、それをどのような教育内容に反映させていたのかということをも明らかにしていくことも必要なのではないだろうか。

2. 学校における音楽会・レコード会の状況

—竜丘・上郷・座光寺の三地域の史料から—

永山香織

(1) はじめに

一連の調査で収集した史料を読み込む中で、大正の終わりから昭和10年代にかけて、現在の飯田市を含む下伊那地区は、音楽文化に対する意識が高い地域だったのではないかと推測される記述が多く見られた。例えば『下伊那教育会史 百周年記念』(1987)には、「明治四十四年、通俗教育施設の一端として150円の奨励金によって蓄音機1台(57円)、ローヤル板(67円50銭)を購入する。内容は、唱歌・詩吟・琵琶・浪花節・義太夫等であった」という記録がある⁵⁾。では、学校教育の中では、

子ども達がどのように音楽と接していたのだろうか。また、地域住民が音楽を通して何らかの形で学校に働きかけることはなかったのだろうか。本稿では、主に鑑賞領域に関わることと音楽会に焦点を当て、竜丘・上郷・座光寺の三地域について見ていきたい。

(2) 竜丘地区

この地域は、自由教育からの影響が大きく見られ、『大正期の竜丘小学校 下平芳太郎校長と自由教育』では、卒業生の関島芳馨氏が、異色の音楽教育が行われていたとして以下のように記している。

「鑑賞だけでなく創作分野の読譜や音階も厳しく(略)各長・短調の一唱節を他調へ変調もさせられた。(略)郡下で初めてドイツからグランドピアノを入れた。鑑賞した曲は、小林八十吉先生ご自分のヴィクターの赤盤種板(レコード)。「森の鍛冶屋」「カルメン中のカスタンネット」「森の水車」「ウィリアム・テル」「アイダ」「ユーモレスク」「ダニューブ河の漣」「蒼きドナウ」等の専ら西洋音楽を聴かせて感想を問われた。」

移調なども含まれており、当時、小学校段階としては高度な内容で授業が行われていたと言えるであろう。大正12年4月12日に、野口雨情と中山晋平を迎えて童謡についての発表会が行われたとの記録があるが、単に、当時の有名な作詞家・作曲家を呼んだというイベント的なもので終わってしまうのではなく、子どもたちも相当な時間をかけて練習や準備をし、高いレベルでの演奏で2人を迎えたのではないかと推測できる。

また、『竜丘学校 百年の歩み』(1973)によると、昭和10年11月14日に、記念館で職員レコードコンサートが催されているが、授業内外で充実した鑑賞活動がなされるためには、蓄音機はもちろんのこと、前述の小林先生のように私物のレコードだけでなく、学校にもレコードが揃っていなければならない。また、音楽の授業を行うためにはピアノが必要といったハード面の整備が不可欠であるが、西島の項に見たように竜丘地区では、尋常高等小学校の予算としてレコード購入やピアノ調律費が組み込まれており、地域からの寄付も含めて、音楽環境を整えるための基盤はあったと思われる。

一方、地域の音楽活動については、『竜丘時報』によると、青年会教育部主催の音楽会が毎年のように開催され⁶⁾、処女会によるレコード会も、昭和6年に2回開催されており⁷⁾、昭和10年3月10日には、「音楽と舞踊の夕べ」として、青年会の軍歌・女子青年会の合唱・ハーモニカバンド等の演奏が行われた。また、昭和13年3月10日の午後7時半から開催された恒例の音楽会は、慰問金募集の下に行ったものであるが、観客1,300余人が集まり大盛況だったという。現代と比べて娯楽そのものが少ないことを考えると、音楽会は音楽を楽しむ場という意味だけではなく、地域の交流を支えるものとして機能し、子ども達も聴衆として参加することで、音楽を‘学んで’いたと言えるのではないか。

それに加えて、同じく『竜丘時報』昭和14年2月22日号によると、1月22日から25日にかけて上川路支会(男女混同)の自治講習会が行われ、最初の3日間に音楽の項目、最終日に音楽レコードの項目が入っている。現段

階で調査済の史料だけでは、実際にどのような内容で行われていたのかまでは不明であるが、鑑賞会といった受身的な形態にとどまらず、より積極的に音楽と関わろうという地域住民の意思の表れなのであろうか。

(3) 上郷小学校・国民学校

学校日誌および学事報告記録によると、昭和10年11月22日に、ピアノ披露演奏会と唱歌会が開催されている。また、昭和11年には、当時高価だった電気蓄音器が婦人会からの寄付という形で購入され、翌12年9月2日には、新購入レコード鑑賞会が行われている。

唱歌会は、昭和16年度から音楽会と名称を変えているが、多い年では年に3回開催され、そこでの発表に向けて生徒や職員が放課後に練習している。そして、ただ発表して終わりということではなく、音楽会終了後に批評会も行われている。

このように、音楽の授業時間外でも積極的に練習の時間を取り、自分たちの発表を振り返りながら、より良い音楽を目指すという姿勢は、「音楽練習は付随的に考へるでなくて(略)一週一回なり、隔週一回なり年中を通して立案の上やってゆく事」(「昭和15年度学校日誌」3月17日の協議会の記録より)という考えが、学校全体として共有されていたからであろう。

終戦の年である20年度は、3月に1度しか音楽会は開催されていないが、プログラムの一つとして、教師によるピアノソロがある。蓄音器から流れるプロの演奏を聴くだけでなく、目の前で身近な人が演奏する生の演奏を聴くことができたということは、生徒にとって‘鑑賞’という面からも大きな意味を持つことではないか。

(4) 座光寺小学校・国民学校

上郷小学校と同じように、唱歌会は、ほぼ毎年、年に2回開催されており(「学校日誌」および「学事報告記録」)、直前になると子ども達だけではなく職員も唱歌練習をしていた。昭和15年は、年に3回も開催されている。ただ、1学級で2曲ずつ発表するなど、時間的に少し長かったようで、昭和13年3月11日の唱歌会の反省として「二時間かかる。多少長く単調の感あり」、14年3月5日には「種目三十八、ちと多すぎたり」との記録がある。

レコード会については、昭和16年に芸能科音楽で、鑑賞という学習領域が設定される前から、学校での年間予定に組み込まれ、全学年対象で実施されている。昭和12年11月26日のレコード鑑賞会では学年ごとに分かれて鑑賞したという記録は残されていないが、13～15年に行われた会では、低学年・高学年の二部に分かれて実施され、また、昭和16年の学事報告には「芸能科音楽 音楽会 毎学期1回(略)蓄音機使用」とあり、更に回数が増えた。レコードの種類が増えてきたために、発達段階に即した楽曲を選択できるようになり、子ども達に聴かせる楽曲の質と量、両方を求めることができるようになってきたということであろうか。

(5) おわりに

今回取り上げた近接の3つの地域は、学校を‘地域の学校’と捉える意識が高く、ピアノや蓄音機の購入に関

しては、競いあうという面もあったようにも思われる。残念ながら、音楽の授業記録は見つかっていないが、上述のように定期的に唱歌会や音楽会が開かれていたということは、そこでの発表に向けての指導を熱心に行っていたのであろう。また、昭和16年以前にレコード会を行っていたことから、普段の授業の中でも鑑賞を取り入れていた可能性もあると推測できる。そして、法的に整備された後、さらに音楽教育を充実させていこうとした教師の思惑も見てとれる。年間行事としてのレコード会だけでなく、上郷では、昭和17年度に朝会で日常的に鑑賞を取り入れるという、当時としては新しい試みもあったが、昭和10年代に学校に在籍していた方々に答えていただいたアンケートでは、鑑賞に関する記述が少なく、予想に反していた。‘聴く’という受動的な活動よりも、実際に授業の中で練習して歌った曲の方が、子どもたちは学校外で口ずさんだりすることによって、記憶に残るのかもしれない。

3. 学校所蔵史料にみる音楽科教育の諸相 —座光寺小学校所蔵レコード付録の検討—

大沼寛子

座光寺小学校には、戦前に購入され、使用されたであろうレコードの付録(歌詞カード、振付解説など)が数多く残されていた。本項では、これらのレコード付録からうかがい知ることのできる座光寺小学校の音楽教育の一端を示したい。

(1) 史料の内容

付録の全体数はレコード36枚分で、記されたレコードのタイトルや用途から大まかにジャンル分けをすると、①鑑賞、②唱歌、③童謡、④遊戯(舞踊・体操・行進)、⑤軍歌・時局関係、⑥その他となった。数量的には、唱歌の範唱レコードが全体の約3分の1を占めていた。

(2) レコード付録にみる音楽科教育の諸相

①鑑賞

《スケイターズワルツ》、《春の歌》《ウォーターローの戦い》(『児童のための音楽鑑賞レコード 第2集』井上武士・小出浩平選定並に解説、昭和13年発売)(写真)、《君が代行進曲》、《郭公ワルツ》《ダニューブ河の漣》、《ヴォルガの舟唄》《蚤の歌》他

これらの作品は、昭和初年頃から鑑賞教材としてたびたび雑誌に現れ、のちには芸能科音楽初等科鑑賞教材として指導書にとりあげられた(山本1999)。また、《君が代行進曲》については、鼓笛隊用楽譜も所蔵されており、鑑賞教材としてだけではなく、行進用あるいは器楽用の補助教材としても使用されていたのではないかと推測される。なお当時の児童のアンケートからは、実際に鑑賞教材として《ヴォルガの舟唄》、《蚤の歌》を聴いた、という回答もみられた。



②唱歌

『文部省新訂尋常小学唱歌』（井上武士監督指導，昭和7年発売），『ウタノホン 上』

これらは皆「正しい歌ひ方」を示す範唱用レコードであったが，国民学校教師用指導書によれば，鑑賞教材としても使用される可能性もあった（山本1999）。

③童謡

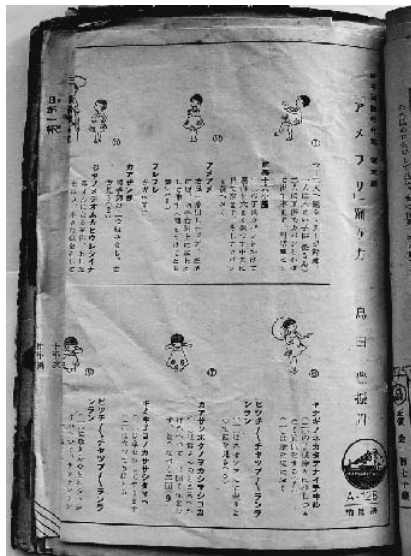
《童謡 オ池ノ常会》，《兵隊さんよありがたう》他

《兵隊さんよありがたう》は，朝日新聞社による懸賞募集で昭和14年に発売された童謡レコードである。B面には「童謡のお稽古」と題して，ダン・道子による指導が録音された。付録の所蔵状況から，座光寺小学校にはいくつかの童謡レコードがあり，学校においても子どもたちが童謡に触れる機会があったと考えられる。

④遊戯・舞踊・体操・行進

《体育ダンス 進軍の歌》，《学校舞踊レコード（中学年用）》，《日本童謡名作集第5集「アメフリ」踊り方》（写真）他

最初の2点は遊戯(当時は「体育ダンス」「学校舞踊」などとも呼ばれた)のためのレコードで，付録には振付解説が掲載されている。レコード(特に童謡)に振付解説を添付した販売形態は，昭和5年にコロムビアに所属していた河野達郎(たつ



ろ)が発案したもので，この種のレコードは当時非常に流行したという。用途としては，体操や運動会，学会などが主であったと予想され，ここに音楽のみにとどまらないレコードや蓄音機の役割がうかがえる。

⑤軍歌・時局に関係するもの

《軍歌 皇軍大捷歌》《軍歌 勝ちどきの歌》，《奉祝国民歌 紀元二千六百年》，《大陸行進曲》他

全体から見ると少ないが，ほとんどが，《兵隊さんよありがたう》などと同様に，新聞社などの懸賞募集によって昭和10年以降に作成されたレコードだと推測される。

⑥その他

《詩吟 川中島，残月》《本能寺》

その他，木村岳風が謡う詩吟のレコードも所蔵されていた。鑑賞教材として用いられたのであろうか。

以上に若干の例を示したように，これらのレコード付録からは，座光寺小学校における音楽科教育の様子，また音楽にとどまらないレコードや蓄音機の役割も浮かび上がってきた。しかし，西島の項の学校予算の状況をみてもわかるように，各学校がレコードに割ける予算はごくわずかであった。各レコードの発売年も考慮に入れば，これらのレコードは，昭和10年前後，つまり国民学校令施行以前から少しずつ買い集められ，それらを用いた活動がなされていたものと推測できよう。

なおこれらのレコードの中には，昭和館監修の『SPレコード60,000曲総目録』に掲載されていないものもあり，レコード史にとっても貴重な史料となりうることを付け加えておく。

4. 飯田地域の器楽活動

—青年会，高等科，青年学校を中心に—

藤井康之

(1) 竜丘地区における青年会の器楽活動

まず飯田地域の器楽活動の一端を，青年団活動がとりわけ盛んであった竜丘地区の男女青年会教育部が主催した音楽会「陸軍記念日奉祝音楽会 音楽と舞踊の夕」から見てみたい。昭和10年3月10日に開催されたこの音楽会は，「青年会の軍歌育唱女子青年会の合唱団等あり，白路会の無邪気平幼童の舞踊は相当期待されてゐる。更に龍峡音楽会ミナトハーモニカバンドの各人士も目下猛練習中」との音楽会の新聞予告が載せられており（『竜丘時報』昭和10年2月28日），当日は1,094人が来場したという（『竜丘時報』昭和10年3月25日）。

このような青年会主催の音楽会はすでに昭和初期には行われており，音楽会には常に多くの聴衆がかけつけたようである。たとえば昭和3年の音楽会について，高島は「青年会事業としても会史以来空前の大盛況でもあつたし本郡楽界未曾有の大会でもあつたと思はれる聴衆者は会員のみならず，全村的又他村よりも陸続として押しよせた。千有余名如何に農村の人達が高尚な音楽慰安を

渴望してゐたかがうかがわれる」(高島繁一「情操教化としての音楽」『竜丘時報』昭和5年5月1日)と述懐していることから、竜丘村以外からも聴衆が「押しよせ」るほど音楽会は高い人気を誇る、村民にとって楽しみな催しであったことがわかる。

青年会では、この他にも村民の娯楽・慰安や出征兵の見送り・帰還などの様々な目的に合わせた音楽関係の催しを行っており、老若男女を含めた村民は歌や舞踊だけではなく、器楽演奏にも身近に触れる機会を自ら得ていた。このことについて、瀬川は「青年会教育部の仕事の一つとして、入隊兵や出征兵の見送りおよび帰還兵の出迎えに参加するものがあり、こうした送別会等に付きものの余興の一つに歌、楽器演奏があった。たとえば昭和4年4月に行われた音楽会では、東京川口ハーモニカバンドが来訪し、聴衆1,000人以上が集まった」(瀬川大「両大戦間期における農村青年集団の活動―長野県下伊那郡竜丘村の事例から―」『東京大学大学院教育学部研究論文』年月日なし、27-28頁)と述べている。

一方、音楽の受け手になるだけではなく、戦時中には、「小学校高等科の時に青年団のハーモニカの折に(村の慰安で)太鼓を担当した事があります」(昭和12年竜丘尋常高等小学校入学)と男子生徒が記憶しているように、戦争にまつわる青年会のイベントを通して、子どもたちは学校外での器楽活動に参加する機会も少なからず得ていたようである。これらのことから、竜丘地区の場合、子どもたちを含む地域の人々と器楽活動とのかかわりは、地域青年会との関わりを抜きにして語ることはできない。

(2) 飯田地域における青年学校、高等科の器楽活動

一吹奏楽器類に着目して一

次に青年学校、高等科を中心とした器楽活動について、吹奏楽器類に着目しながら見てみよう。まず、上郷地区で行われた興味深いイベントについて触れてみたい。上郷では昭和14年の紀元節の式典中において、『国ノ鎮』をラッパで演奏したとの記録が残されている。式典の前に、「午前八時各区神社ニ各種団体、小学校生徒一般村民集合小学格(ママ)に向ケ愛国行進(愛国行進歌高唱)」(『上郷時報』第216号、昭和14年3月15日)とあり、この行事は村をあげてのイベントであったことが分かる。誰がラッパを演奏したのかは不明だが、小学校児童や村民たちは荘厳な雰囲気の中、ラッパの音・音楽に触れたと推測される。

では、青年学校、高等科の吹奏楽活動はどうだったのだろうか。昭和15年以降の上郷と座光寺の学校文書には、青年学校や高等科の生徒が各々の小学校(国民学校)に来校し、ラッパやブラスバンドの練習を行った記述が以下のように見られる。

【上郷】

- ・昭和19年8月17日「高男 吹奏楽練習に東野校へ」(昭和19年度学校日誌)
- ・昭和20年5月10日「青年学校生徒 ラッパ練習 青校 山上元治君 ラッパ指導に来る」(昭和20年度学校日誌)

【座光寺】

- ・昭和15年4月4日「ラッパ練習ニ付キ青校生徒来校」

(昭和15年度当宿直日誌)

- ・昭和15年4月10日「ブラスバンド練習」(昭和15年度当宿直日誌)
- ・昭和16年1月11日「青校ラッパ講習 三日間」(昭和15年度職員会誌)
- ・昭和17年1月27日「ラッパ伝習 青年学校生徒 鈴木君右ノ指導ニテ」(昭和16年度当宿直日誌)

上述のようにいくつかの記述が見られるが、なぜラッパや吹奏楽を練習してきたのかについては史料からはわからない。上郷地区で演奏された『国ノ鎮』のように、四大節等のイベントで演奏するために練習を行った可能性もあるかもしれない。

学校にかかわるイベント以外にも、竜丘地区では高等科の男子生徒が「出征兵士を送る朝(高等科1~2年の時)飯田線時又駅まで(管楽器5~太鼓3人)で行進に参加した(勝つて来るぞと勇ましく誓って…の曲を吹奏した)」ことを記憶しており、戦時下では出征兵士の見送り等の場面で吹奏楽が演奏されていた。

また座光寺地区では、戦時色が濃くなる昭和17年に、「少年団の一翼として高等科男子をして海洋航空少年隊、同女子をして救急看護少女隊を編成せしめ、職員が特別に訓練を施し兼ねて少年団幹部としての錬成を期す」る座光寺青少年団が結成され、その活動の中で「ラッパ鼓隊訓練」が行われていた(「少年団員の生活(その四)」『座光寺村公報』第66号、昭和18年3月)。その趣意書の「建設費予算」には、「ラッパ鼓隊訓練」に使用される「ラッパ鼓隊鼓笛隊用具各一組」として二千元が申告されている(「紀元二千六百二年四月 芳名簿 座光寺村」中の「座光寺村海洋航空少年隊救急看護少女隊建設趣意書」[座光寺支所文書])。具体的な活動を示す史料は残されていないが、戦時下における座光寺村の重要なイベントにラッパ鼓隊が関わったのであろう。

ここで、講習会についても触れておきたい。飯田地域の器楽活動の活性を支えたと考えられる「喇叭鼓隊講習会」(昭和10年4月24日~28日開催)の史料がある。この講習会は「青年ノ志気ヲ鼓舞シ青訓ノ振興ヲ計ラントス」ることを目的として催されたもので、陸軍戸山学校音楽部員が講師となり、松本市で行われたものである(「下伊那教育部会昭和十年度郡内文書綴」)。講習会に関する史料は一つしかないが、この種の講習会が飯田地域の吹奏楽活動の普及に与えた影響は大きいのではないだろうか。

本節では、青年会、青年学校、高等科を中心に、飯田地域における器楽活動の様相の一端を述べてきた。飯田地域の器楽活動の様相をより丁寧に描き出すためには、今後さらなる史料調査や聞き取り調査が必要となってくる。

飯田地域における子どもたちを含む地域の人々の器楽活動が、学校に関わるイベントだけではなく、この時期に盛んに行われた地域のさまざまなイベントと深く関わっていることは重要である。このことを踏まえた上で、子どもたちの器楽活動や器楽経験を、学校と地域とのより広い関係の中で意味づけつつ、豊かに描き出す必要があるだろう。

5. 座光寺小学校、上郷小学校の器楽の状況

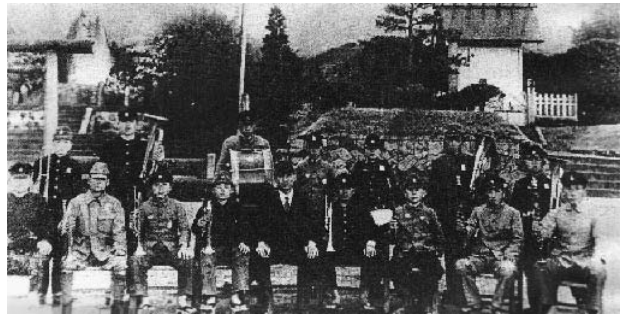
本多佐保美

(1) ブラスバンド

写真は、近隣の丸山国民学校の音楽隊である（伊那史学会編（2007）『保存版 飯田市の70年』一草舎出版より）。こうした音楽隊、ラッパ鼓隊が竜丘、座光寺、上郷各学校にあり、高等科および青年学校の生徒を中心に吹奏がなされていたことは、アンケート回答から見てとれる。「土蔵の中に保管されていた楽器、トランペット1、クラリネット1台、コルネット1、トロンボーン1、バリトン1、バス1、大太鼓1、小太鼓1、横笛3。楽器吹奏の際、数字譜を使った。出征兵士を送る朝（高等科1～2年の時）学校～飯田線時又駅まで（管楽器5～太鼓3人）で行進に参加した。」（竜丘、昭和12年度入学、男）座光寺では、「（前略）洋大・小鼓（運動会、出征兵士壮送の時に高等科の人達が演奏した）」（座光寺、昭和13年度入学、男）上郷では、「小学生の時には、楽器には手をふれない。高等科に入ると少ない楽器、ラッパ、大タイコ、小タイコ、数少ない、6、7人の使用。」（上郷、昭和12年度入学、男）「グランドピアノ、木琴、大タイコ、小タイコ、ラッパ等。木琴、ラッパ等、グループで練習した事あり。」（上郷、昭和14年度入学、男）などが見られる。

ブラスバンドは、先に藤井の項で見たように戦時下の儀式・行事に関連するイベントで吹奏されたり、また運動会で演奏された。「運動会の音楽には蓄音器のレコードもあったが、なんと上郷小学校ではなまのブラスバンドがついた。それだけの楽器もあったし、大校だけにそれだけの演奏のできる先生方も揃っていた。ふだんむつかしい顔をしている先生方が、この時ばかり天幕の中でのびのびと楽しんでいるように見えて、生徒たちもなんとなくウキウキとしたものである。」（上郷小学校20年会編著（1995）『子どもたちの上郷国民学校 ペったんおしなご 海ゆかば』續文堂出版、57頁）。

以前調査した高遠において小池先生、御子柴先生の二人がクラリネットを吹いたという記憶が語られたが、飯田地域においても、特に戸外で全校生徒が歌う朝会の時、あるいは運動会の時などにクラリネットを教師が吹いたという状況があった。「高橋先生は朝礼時等の君が代や校歌をクラリネットで演奏した。」（上郷、昭和13年度入学、男）、「〔運動会の〕行進の時、高橋先生のクラリネットの曲にあわせて全校が集合したり、つなひきなど団体の行動の時にかけ足をすることがありますが、音楽の音が小さいので困りました。しばらくしてレコードになりました。」（上郷、昭和12年度入学、男）、「担任—鈴木克己先生、音楽が達者でクラリネットを上手に吹奏しました」（座光寺、昭和13年度入学、男）。近隣の丸山国民学校卒業生のアンケート回答にも、「常盤先生（クラリネット）、ピアノ、オルガン、ラッパ、大太鼓、小太鼓、先生以外は使用不可」（丸山、昭和15年度入学、男）、「常盤先生、神社等野外で歌う時には、クラリネットで伴奏された」（丸山、昭和16年度入学、男）という記述が見られた。軍楽隊からの吹奏楽の流れが、当時の学校における器楽の一つのあり方としてあったといえる。



座光寺小学校に残された史料の中に、鼓笛隊楽譜がある。昭和12年、共益社書店発行のものであるが、「座光寺国民学校」の所蔵印が押されていることから、国民学校になってから購入されたことがわかる。《日の丸（行進曲）》、《勇敢なる水兵》、《出陣の歌》、《君が代マーチ》の4曲で、それぞれに笛用、太鼓（小太鼓）用、指揮用の3種類がある。一方、座光寺の「昭和十六年度 職員会誌」4月9日の項に、「芸能科 音楽 音楽会 毎学期一回、式歌練習 十分徹底サセル、職員 音楽研究ヲ為ス、楽器 木琴一〇 笛一〇 購入 ハーモニカ（個人）活用、蓄音器使用」との記述がある。国民学校芸能科音楽となり、音楽会の毎学期開催、式歌の練習、器楽指導に鑑賞と制度に見合う内容を充実させていこうという意気込みが感じられる記述である。楽器としては「笛一〇」が購入されている。《勇敢なる水兵》と《君が代マーチ（レコードでは君が代行進曲）》は、大沼の項で見たレコード付属資料にあり、これらの曲は当時すでに、運動会等で耳なじんでいた曲である。残された楽譜、楽器購入記録、レコード付属資料を照らし合わせると、昭和16年からの国民学校の制度実施にあたり、これまでの高等科等での吹奏楽の実績をもとに、小学校（国民学校）でも鼓笛隊の音楽活動を行おうとしたのではないかと推察される。昭和16年度の運動会には、レコードではなく生演奏で《日の丸》や《君が代マーチ》を披露することが目論まれたのではないだろうか。

(2) 木琴とハーモニカによる器楽合奏

昭和16年度の上郷の学校日誌「昭和十六年度 上郷国民学校（一）（二）」に、3月の第2回音楽会の反省会の記述がある。音楽会は3月8日、中学講堂にて行われ、零時十分に終了、その後反省会が持たれた。「（前略）6. 器楽につき、ハーモニカ 呼吸のし方をもっと、アコーディオン 弾き方の指導、木琴 □□につき、教則本指導書を□□□□、7. 歌曲の選び方につき、尋常教科書のものをやるがよい、「荒城の月」三回もやった事〔由？〕プログラムをうんと前に打合せの事〔由？〕、発表会の意をしっかりとせよ、尋常教科書以外のものをやらねば 和音訓練の教材なし、8. ピアノを弾きタクトを取るは如何 議論あり、9. 器楽をやるに音楽に子供が熱心になる、（下線は引用者）10. プログラム（大プロ）の工夫如何、11. 職員の出演を来年は是非、午後四時二十分終了」多方面にわたり討議が行われているが、音楽会でハーモニカや木琴等の器楽が取り入れられ、課題は多いものの好評であったことが読み取れる。昭和17年度の同じく上郷の学校日誌「昭和十七年度 学校日誌

上郷国民学校」にも、「11月24日 放課後 音楽練習（職員）、11月27日 朝会 音楽練習、11月28日 放課後職員音楽練習 音楽会場準備 中学講堂、11月29日 音楽会 午前八時二十分より、音楽会反省職員会 零時半より二時二十分終る、音楽会反省議事（中略）4. 聴き方を今一層 児童訓練の事、5. 一部を今少し長く 二部を短くする事、6. 一部の終りに全員のうたふ歌をおく事、7. 講堂へ出入の際の礼を訓練の事、8. 第三学期に今一度やりたし、有志でやるは如何、会場は自分の学校で、9. 器楽の吹奏もよろしかった」との記述が見える。

一方、アンケートにおいても、木琴、ハーモニカについての記憶はいくつも見られた。上郷では、「木琴は音楽会に使用する場合等は使わせてもらい、両手が上手に使えず苦勞したのをおぼえています。」（上郷、昭和12年度入学、女）「音楽室ありました。備品 グランドピアノ、オルガン、木琴。ピアノは先生だけ。木琴は全員。オルガンは時々私達にも使用出来た。」（上郷、昭和12年度入学、不明）「楽器はピアノ1、オルガン1、木琴3位。ピアノ、オルガンには生徒はふれることが出来ませんでした。木琴は交替でさわる程度でした。」（上郷、昭和16年度入学、女）座光寺においても同様に、「音楽室ありました。木琴、蓄音機、オルガン。」（座光寺、昭和13年度入学、女）「音楽室は長い二階建の一番南側のとても気持のよい眺めの場所で、ピアノとオルガン、木琴（小）がありました。ピアノはほとんど先生。高学年になって、専任〔の先生？〕。木琴は数が少ないので順に替って練習した。」（座光寺、昭和15年度入学、女）といった回答が見られた。以前調査の高遠においては、昭和16年2月にトライアングルやミハルス、太鼓、シンバルの購入記録が見られる（「昭和18年度現在 備品原簿」）ものの、当該時期の音楽会プログラム（昭和17年度、18年度）には器楽の演目はなく、器楽指導が軌道にのるのは戦後のことであったことと比較して早い動きである。

器楽指導に用いる楽器として、座光寺では、「木琴一〇」を学校として購入しつつ、個人持ちの楽器も活用していったモノの整備状況に加えて、先に見たように吹奏楽の実践が先行して行われていたことが、指導する教師側の意識を高め、国民学校における器楽指導の実現を容易にしたことも考えられる。「下伊那教育会記録 昭和十七年度」に、昭和17年の音楽講習のことが記されている。夏休み中の1週間に行われた「教員学力補充講習」の指導内容は、1. 唱歌法 2. 指揮法 3. 聴覚訓練 4. 器楽 5. 国民学校音楽解説となっている。毎日8時間の講習があり、そのうち器楽練習は30時間を割いている。受講者を3組に分け、女子組を栗原先生、男子組を高野〔？〕忠、常盤元先生が担当した。教科書として、長野県師範学校附属国民学校教科研究会編（1941）『国民学校 教科の実践的研究』信濃毎日新聞出版部が指定されていた。常盤先生は、丸山国民学校でブラスバンドを指導し、クラリネットが得意であった先生と考えられる。多和田は飯田地域で下伊那教育会など教員のネットワークが、情報交換や教科研究の場として強力に機能していたことを指摘している⁹が、この昭和17年の音楽講習会もそのネットワーク機能の一端の表れととらえられ

る。こうした講習会等で教員の意識が高められ、比較的早い時期の器楽指導の実現を可能にしたとも考えられる。

成果と課題

本研究では、メディア論的視点および西島央（2006）の論考に学びつつ、蓄音器やレコード、楽器といったモノの要素に着目して、昭和初年から10年代にかけての音楽科教育成立への条件整備の様相をとらえることを目指した。

本研究の成果としては、モノ的要素に着目することによって、音楽科教育成立の様相を一定程度把握することができ、また制度実施以前の整備状況と制度実施以後の動きについてとらえることができた。また、一つの学校の事例にとどまらず、いくつかの学校の状況を重ね合わせることにより、地域の全般的状況および地域と学校との関わりの様相も見えてきた。

今後の課題としては、現在継続中の長野県上田地域の調査をすすめ、高遠・飯田との比較および長野県全体としての動きをとらえていく必要がある。また、当時の楽器産業やレコード産業の状況、モノの流通や人々の受容についてさらに見ていく必要があると考える。

付記：本稿は、日本音楽教育学会第39回大会（2008年11月8日、国立音楽大学）における口頭発表（共同企画）をもとに加筆したものである。なお、本研究は平成20年度科学研究費補助金 基盤研究C(2)「昭和初期小学校音楽科教育の形成過程に関する研究」（研究代表者：本多佐保美、課題番号：20530803）による研究成果の一部である。

注

- 1) これまでの研究の経緯については、平成13～15年度科学研究費補助金 基盤研究B(1)研究成果報告書『音楽教育史研究における制度・教師・学習者の関係性の探求—国民学校時代の音楽教育体験者の聞き取り調査に基づいて』、および平成17～19年度科学研究費補助金 基盤研究 C(2)研究成果報告書『昭和10年代の音楽教育実践史に関する総合的研究』を参照。
- 2) 佐藤卓己（2006）「声の電体主義と日本主義メディア」、洋楽文化史研究会・日本音楽学会関東支部合同例会シンポジウム口頭発表資料。
- 3) 西島央（2006）においてすでに、モノ的要素に着目した音楽教育の歴史研究の可能性について論じている。
- 4) 『竜丘村勢一覽』は決算ベースでつくられた歳入歳出費を元に作成したのに対して、表1、表2は予算書であるため、額が一致しないところがある。表2の小学校需用費には、表1の需用費、修繕費、恩給基金が含まれているものの、それをあわせても額が一致せず、その理由は不明である。
- 5) 通俗教育とは学校以外の成人・青年・婦人会一般民衆を対象とする教育で、大正十年以後、社会教育と呼称されるようになった。
- 6) 昭和3～14年の記録より。3月開催が多い。

- 7) 駄科処女会が2月, 桐林処女会が11月。
8) 多和田真理子(2008)「報告についてのコメント」『昭和初期小学校音楽科教育の形成過程に関する研究(共同企画報告)』『音楽教育学』第38巻第2号, 64頁。

引用・参考文献

- 飯田市竜丘史学会編(1996)『大正期の竜丘小学校 下平芳太郎校長と自由教育』
伊那史学会編(2007)『保存版 飯田市の70年』一草舎
井深雄二(2004)『近代日本教育費政策史』勁草書房
小川正人(1996)『教育財政の政策と法制度』エイデル研究所
川添利基編(1940)『日蓄(コロムビア)三十年史』日本蓄音器商会
上郷小学校20年会編著(1995)『子どもたちの上郷国民学校 ペったん おしなご 海ゆかば』績文堂出版
倉田喜弘(1979)『レコードの文化史』東京書籍(東書選書版, 1992年。岩波現代文庫版, 2006年。)
『下伊那教育会史 百周年記念』(1987)
昭和館監修(2003)『SPレコード60,000曲総目録』アテネ書房
瀬川 大「両大戦間期における農村青年集団の活動—長野県下伊那郡竜丘村の事例から—」『東京大学大学院教育学研究科研究論文』年月日なし, 27-28頁
全日本児童舞踊協会(2004)『日本の子どものダンスの歴史—児童舞踊100年史—』大修館書店
『竜丘学校百年の歩み』(1973)
長野県教育史刊行会(1983)『長野県教育史』第三巻 総説編
長野県教育史刊行会(1975)『長野県教育史』別巻一 調査統計
西島央(2006)『楽器・唱歌室からみた唱歌教育の普及過程—明治20年代の長野県を事例に』(平成15~16年度文部科学省科学研究費補助金(萌芽研究)報告書)
細川周平(1998)「近代日本音楽史・見取り図」『現代詩手帖』41(5), 24~34頁
山本文茂(1999)「芸能科音楽教材の特質—教科書・教師用指導書の分析を通して—」『音楽教育の研究—理論と実践の統一をめざして—』音楽之友社, 278~295頁